

日本 Bangladesh 協会の皆様へ

■目次

1) 巻頭言『Bangladesh のジェンダー事情について』

副会長 村山真弓

2) 特別インタビュー『伊藤直樹新大使に訊く』

駐 Bangladesh 日本国大使 伊藤直樹

3) 現地便り『イシュワルディ EPZ で生き抜く』

(株)東和コーポレーション 池本 秀文

4) 会員便り『25年間にわたり Bangladesh をみつめて (連載その3)』

-在 Bangladesh 大使館の日本企業支援について-

在 Bangladesh 日本国大使館 参事官 進藤康治

5) 理事寄稿『Reminiscent of a Bangladesh Born Commoner Living in Japan over Half a Century』

理事 七田央

6) イベント、講演会の案内

7) 『事務連絡』

■ 1) 巻頭言『Bangladesh のジェンダー事情について』

副会長 村山真弓

最近「女性枠」を理由に仕事を任されることが重なったので、今回の巻頭言を書くにあたって、Bangladesh のジェンダー事情について考えてみた。

2019年7月現在、選ばれた国家元首に座に女性が就いているのは、世界27カ国で(ウィキペディア)、Bangladesh はその一つである。1990年末のいわゆる民主化運動でエルシヤド政権が倒れてから現在に至るまで、選挙を通じて選ばれた国家元首はシェイク・ハシナおよびカレダ・ジアという二人の女性に限られ、任期は二人合わせて25年を超える。つまり2021年に建国50周年を迎えようとする Bangladesh の歴史の半分以上は、女性のリーダーシップのもとで国家運営が行われてきたということになる。彼女達の政治力の背景には、父なり夫なりの威光があるのは事実としても、これほど女性の長期政権が続く国は、稀であろう。

ダボス会議の通称で知られる世界経済フォーラム作成の「グローバル・ジェンダー・ギャップ指数」によれば、2018年現在、Bangladesh は対象国149カ国のうち48位である。他の南アジア諸国をみると、インド108位、パキスタン148位、スリランカ100位、ネパール105位、ブータン122位、モルディブ113位と、Bangladesh の順位がずば抜けて高いことがわかる。Bangladesh は、調査が始まった2006年の114カ国中91位から大きく順位を上げた。ちなみに2018年の上位にはアイスランド、ノルウェーといった北欧諸国が並んでいるが、ジェンダー・ギャップの大小は、経済の発展度とは必ずしも一致していない。米国は51位、日本はなんと110位である。

総合的指数を構成するのは経済参加と機会、教育の達成、健康と生存、政治的エンパワーメントの4側面に関する指数である。Bangladesh の場合、教育および健康については男女間の格差が小さい。中でも初等・中等教育の就学率については2000年代、平均余命に関しては1990年代初めに男女格差は逆転し、女性が男性を上回るようになった。また上述の通り、過去50年間における女性の国家元首の就任年数では、世界第1位となっている。

他方、立ち遅れているのは経済面である。労働参加率、賃金格差、経営者・専門職・技術職における比率等、すべての面で世界平均よりも男女格差が大きい。政治の側面でも、国会議員や閣僚数については、元々世界的に男女格差が大きいなかで、Bangladesh の女性議員・閣僚比率は平均よりもさらに低い。首相職に女性が就いていることが、むしろ例外的といえよう。

去る9月26日、国際開発学会主催、当協会も共催として開かれたセミナーにて、Bangladesh を代表する知識人の一人で、SDGs(持続可能な開発目標)に詳しい Dr. Debapriya Bhattacharya は、ジェンダーに関する現況と残された課題について、女子学生のドロップアウト率の高さ、児童婚、近親者による暴力を指摘した。また Bangladesh 政府は議員

の女性比率として地方自治体の議員比率も加えて報告しているが、数を増やすだけでは、その組織が質的にも変わる(彼は「女性化」という言葉を使った)ということにはつながらないと述べていた。

日本と Bangladesh の関係が、かつての開発援助・支援のみという状況からビジネスへと大きく広がっていくにつれて、そこに関わるジェンダーの課題も新しい局面を示していくことになるだろう。確実なことは、日本、Bangladesh 双方において、ジェンダー問題解決が最重要事項の一つとして位置づけられている現在、課題解決によって得る経済的・社会的利益(あるいは課題を無視することのリスク)は極めて大きいということである。

当協会が、今後会員が積み重ねていく取り組みを共有するプラットフォームになれば、素晴らしいと思う。

■2) 特別インタビュー『伊藤直樹新大使に訊く』

駐 Bangladesh 日本国大使 伊藤直樹

*10月中旬に赴任する伊藤直樹駐 Bangladesh 大使にお話をうかがった。(聞き手 編集部)

—外務省の道を選ばれたのは?

学生時代、初めての海外旅行で東南アジアに行きました。シンガポールから、鉄道とバスを乗り継いで、マレーシア、タイと回りました。地方を旅してみると、まだまだ日本に対する厳しい見方があると感じました。鋭い言葉も浴びました。1981年のことでしたが、まだ先の戦争を引きずっていたのです。このアジアの人々との信頼をどう築いていけば良いのかと、おぼろげながらも問題意識が芽生えました。そういう仕事が出来るところはどこか?これが外務省を選んだ理由です。自分はビジネスに向いているとも思いませんでした。

その後、英国に研修しました。勉強は大変でしたが、のびのびとラグビーやボート、ゴルフなどスポーツにも興じました。英国は、その後も勤務の機会があり、都合7年住みました。

—外務省で手掛けた仕事で印象に残っているのは?

入省すると、毎日半徹夜の勤務が続くこととなり、各省庁との調整に長時間を費やしました。今では想像もつかない世界でした。大変厳しい勤務環境でしたが、鍛えられたと思っています。

印象深い一つの仕事は、2004年の小泉総理訪朝に北東アジア課長として同行し、拉致被害者のお子様方と一緒に帰国したことです。普通の相手とは首脳会談の準備のやり方も違いましたが、拉致問題にも一定の進展を見ることができました。

また北朝鮮核問題をめぐる六者会合では、2005年秋に非核化へ向けた合意が出来ました。各国にそれぞれの立場があつて難航する中で会合を重ね、佐々江代表が各国代表との間で精力的に調整をされ、議長国中国にも助言し、合意に漕ぎ着けました。残念ながら実現に至りませんでした。このプロセスに関与できたことは、とても貴重な経験でした。

—これまで南アジアとの関わりは?

1999~2001年にミャンマーに在勤しました。民主化以前の時代で、政治的自由はなく移動も制限され、閉塞感がありました。一人当たり所得は100米ドルで、貧しくも慎ましい生活振りでした。太平洋戦争はありましたが、独立以降、表立った日本批判は控えてくれています。とても親日的です。ネウイン時代に高等教育の空白期間があり、今も人材面で尾を引いている面があります。しかし、非常に真面目で勤勉な国民であり、発展の潜在性を感じました。

当時、欧米諸国は人権と民主化重視で、国軍に批判的。西側で二国間の支援をしているのは日本だけでした。現地の場合でも、「日本が軍事政権を利する援助をしている」と批判の矢面に立たされました。援助と言っても、現地 NGO を通じた草の根無償が中心で、学校、病院など BHN 分野でのささやかなものでしたので、国際 NGO にも入ってもらうように工夫し、件数もだいぶ増やしました。何ごとも国軍が関与しないと動かないところで、①国軍に関与して物事を動かしていくか、②国軍とは距離を置いて何もしないか、日本と西側諸国との立場が分かれたのです。その間隙を突いて、中国がインフラを建設、影響力を強めていました。

当時はミャンマーからの避難民が少しずつ帰ってきており、自分も現地に視察に行き、舟で戻ってくる様子を見ました。他方、ラカイン州に仏教徒の入植が始まっており、ロヒンギャをめぐる問題が複雑な様相を呈してきていました。

2008~2011年にニューデリーに在勤しました。ともかくタフな国だと感じました。優秀で議論に熱心、理屈を振り回し、雄



弁に語る、日本人とはまさに対局にある国民です。広大な国土に多様な民族、宗教、文化と、多様さと奥深さに圧倒されました。一つの国としてまとめ運営していくのは、とても難しいことではないでしょうか。そうはいつても、このチャレンジに対し、世界最大の民主主義国国家として、経済成長にもめざましいものがありますし、各州に至るまで、一ヶ月以上かけて自由で公正な選挙を実施してきているのは、凄いと思います。

ーバングラデシュは初めて？

アジアに携わりたかったので外務省に入りました。本省の課長として北東アジアとASEAN諸国を担当しました。在外ではミャンマー、インドに在勤した後、今度バングラデシュに赴任することで、自分の中では地図が繋がったとの感慨を覚えています。バングラデシュは、南アジアと東南アジアとを結ぶ結節点です。

2015～2017年、JICA理事を務めました。アジアの諸国では、情報、エネルギー、高速鉄道など、経済発展のために多大なインフラが必要とされています。日本は、これまでもODAで質の高いインフラ整備を支援してきました。インフラ需要が大きいだけに、官民連携してAll Japanで対応していこうとする雰囲気が強くなってきています。

またJICAでは、中小企業の海外展開支援のプログラムを制度設計し、立ち上げていました。中小企業は、ベトナム、ミャンマーと進出していきましたが、いよいよバングラデシュの番になっていると思います。

そして何と言っても衝撃的であったのが、2016年7月のダッカ襲撃テロ事件です。バングラデシュの開発事業に携わっていた日本からの援助関係者7名が貴い命を落とされました。バングラデシュ大使を拝命した際に、まず脳裏をよぎったのは、この事件の犠牲者のことでした。ご遺志をしっかりと継いで、バングラデシュの発展に向けてさらに支援を進めていこうと、自分の使命であると考えています。

ー日本とバングラデシュの関係は？

親日的であり、経済関係が緊密化していると感じています。発令後、多くのビジネス関係者とお会いしてきましたが、皆様がバングラデシュに寄せる熱意をひしひしと感じました。バングラデシュには、市場と労働力があり、そして戦略的要衝であることを、良く理解され、日本経済のフロンティアであると認識されておられます。特に、縫製、発電などへのご関心が高いとの印象を受けました。

今後、2020年(ムジブル・ラーマン生誕100周年)、2021年(独立50周年)、2022年(国交50周年)と、節目となる年が続きます。要人往来を進めるとともに、経済交流と並んで、文化交流を盛んにするきっかけを作れればと思っています。タゴールを生んだ、文化を愛する国民です。若い頃に岩波ホールでサタジット・レイ『大地の歌』を観ました。

現地へ行って音楽はじめ文化を肌で感じ、自分の眼で良く観ながら、どういう交流を進めて行けば良いかを考えたいと思います。日本国民にバングラデシュについて、しっかりとイメージを持ってもらうことがとても重要だと考えています。どうすれば一層の相互理解につながるのか、そのためにどのような働きかけができるのか、大事な課題です。

ー日バ協会へのメッセージを？

日バ協会が、最近強化され、個人・法人会員が増えているのは素晴らしいことです。日バ関係の進展に伴い、日バ協会の活動が伸びていることの意義は大きいと考えます。大使として職務を進めていくと、日バ協会の活動も発展していく、そして会員も増えていく。こうした好循環を生み出すことが出来ればと願っています。

ーご家族、スポーツなどは？

妻と息子と娘がいます。娘が進学期にあたるため、残念ながら、単身で赴任します。

バングラデシュでも盛んなクリケットは英国留学時代に少しやりましたが、野球とは違い、バットで玉を打つのがとても難しいのです。印ではクリケット・プレミアリーグが大変な人気で、試合の観戦を楽しみました。バングラデシュでもプレミア・リーグが出来たと聞きましたので、観戦し、ファンになりたいと思っています。

ーどうもありがとうございました。



10月2日日バ協会主催新旧大使歓送迎レセプション
写真左 伊藤大使、右 泉大使

【伊藤直樹大使の略歴】

1960年 東京生まれ、東京大学法学部卒。1984年 外務省入省 英国研修(ケンブリッジ大学)

本省は、南東アジア第二課長、北東アジア課長、国際協力局政策課長、経済局審議官など。また JICA 理事(2015-2017)

在外は、ミャンマー(1999-2001)、国連代表部(NY)(2001-2003)、印(2008-11)、英国(2011-14)、シカゴ総領事(2017-19)など。

■3) 現地便り 『イシュワルディ EPZ で生き抜く』

(株)東和コーポレーション 池本 秀文

皆様、こんにちは。2012年7月に現地法人を設立し、イシュワルディ EPZ で2015年8月より作業用手袋を生産しています、東和コーポレーションと申します。前回の寄稿が2017年3月号ということで、約2年半ぶりとなります。

1. イシュワルディ EPZ では厳しい状況が続く

生産開始から丸4年、前回の寄稿から2年半も経ちましたが、幸か不幸か私共の環境にはほとんど変化がありません。天然ガスはつい先日、ようやく供給が開始されたものの、信じられないようなトラブルも起こり、品質面なども含め、まだまだ予断を許しません。停電も普通に起こりますし、各種サービスが改善されたという感じもありません。各種指標を見る限り、バングラデシュという国の成長に関しましては疑う余地がありませんが、私共の EPZ では相変わらず厳しい状況が続いていると感じています。日系企業様の視察は定期的にありますし、他国の新しい工場もぼちぼち建築されてはいるものの、相変わらず手付かずのプロットだらけでして、あまり人気のないエリアなのだなと思っているところです。皆様のエリアではいかがでしょうか。

2. 限定された行動範囲

インフラや各種行政手続きの話になると愚痴しか出てきませんので、今回は日常生活の話を中心にしたいと思うのですが、実はあまり話せることがありません。なぜかという、弊社では空港と EPZ、EPZ 近くの従業員寮の間の移動はすべて社用車なのですが、勤務時間外の外出は、安全面の理由から、原則禁止としております。従いまして、行動範囲は基本的に従業員寮と EPZ の間の往復(しかも車でたったの2分)しかなく、非常に限定されているために、現地スタッフとの会話から、周辺の変化を感じ取るくらいしかできないのが現状であるからです。

大使館では今年の4月より外出を可能とするようにしたと伺っていますので、弊社でも、そのうちに外出禁止の内規は見直す可能性はあります。しかし、都会と田舎ではあまりにも環境が違いすぎるため、外務省の発表する安全警戒レベルが1に引き下がるなどの大義名分がないと、会社としては難しい意思決定となります。この点は、今でも頭を悩ませているところです。

3. ロシアの原子力発電所建設プロジェクト

数少ない周辺情報の一つですが、イシュワルディ EPZ から車で10数分移動したあたりに、田舎町には全く似つかわしくない、高層マンションが立ち並んでいるエリアがあります。これはロシアが建設中の原子力発電所プロジェクトに携わっている方々の住居ということのようです。ちなみに、原発の場所はラロンシャー・ブリッジのすぐ東側に位置しており、現在はグーグルマップでもその場所が確認できます。

電力の安定供給はもちろん楽しみの一つではあるのですが、近いうちに、外国人向けのスーパーマーケットやレストランなどが出来るのではないかと現地では噂されています。ちなみに、7月末に工場に出張に行った際に、マンションの周辺を探索してみましたが、小さなコンビニが1軒と、ロシア人専用のレストランが1軒あるのみでした。夜に通るとかなり多くの窓に電気がついていて、人口もかなり増えたのではないかと予想されます。イシュワルディ EPZ はダッカから西北西に約200km と遠く、食料の調達には本当に苦労していますので、「良いスーパーマーケットが出来るといいな」と心から願っています。(とはいえ、自分たちで買いに行くことはほとんどなく、現地スタッフの方をお願いをして買い物をしてきていただくことになるのですが)

4. Quality of Life の向上を図る

外出もままならない状況の中、現地での Quality of Life(生活の質)を向上させようと思うと、どうしても寮の環境や食事をよくしよう、という方向性になります。寮の部屋を 10 部屋から 16 部屋に増やし、多くのスタッフが同時に出張できるようにしたこと、日本食のコックさんを採用したという 2 点が前回寄稿からの大きな変化になるでしょうか。

工場への出張に関しては、日本からだけでなく、中国の自社工場からの技術支援も多いのですが、中国人社員の方々の手料理は大変おいしく、タイミングが合えばですが、豪華な中華料理を食べられるというのは、現地での大きな楽しみの一つとなっております、視察等の際に滞在されるお客様からも大変好評をいただいております。

新しく仲間に加わったコックさんは、ダッカの日本食レストランで 6 年間働いていたとのことで、工場で食べるお昼ご飯にちょっとした変化が生まれました。さすがに毎日カレーばかりだと飽きますので、選択肢が増えたことは素直にうれしく思っています。

近日中に新規生産ラインの追加を予定しておりまして、社員一丸となって工場運営を頑張っている状況です。皆様も、近所でお仕事があるときはぜひお立ち寄りいただければと思います。今後どうぞ宜しくお願いいたします。

■4) 会員便り 『25 年間にわたりバングラデシュを見つめて(連載その3)』

—在バングラデシュ大使館の日本企業支援について—

在バングラデシュ日本国大使館

総務・経済・開発協力参事官 進藤 康治

1. 総論

大使館というところはどんな仕事をしているのか、今ひとつピンとこない、と思っらっしゃる方はたくさんいらっしゃると思います。私は在バングラデシュ日本国大使館で総務、経済、そして開発協力という 3 つの分野の総括を担当しておりますが、その中で近年業務量が急増しているのが、経済分野における「日本企業支援」という業務です。外務省、及び大使館・総領事館等の在外公館は、日本企業の競争力を高め、世界の成長市場を獲得し、日本の経済成長に取り込むという理念の下、個別企業の活動を支援し、必要に応じ官民連携で取り組み、日本企業の海外展開を支援する日本企業支援に、重要な任務の一つとして取り組んでいます。詳しくは外務省 HP の以下のページをご参照ください。

https://www.mofa.go.jp/mofaj/annai/zaigai/kigyoyo/ichiran_i.html

バングラデシュにおいては、年率8%とも言われる急速な経済発展が続いており、外国企業関係者の当地進出が増えております。それにともない、当地への投資を検討されている日本企業関係者の当館への来訪も大幅に増え、大使以下手分けをして対応しておりますが、私自身も多いときには一日 4~5 件もの企業関係者との面談を行っております。

それでは、日本企業支援としてどのような活動を行っているか、ご紹介したいと思います。

2 日本企業支援の主な業務内容

大使館における日本企業支援としては、主に下記のような業務がございます。

(1) 政府機関等による、日系企業に対する不平等または不適切な措置がとられた場合、大使館として是正を求める働きかけを行います。

(2) 政治・治安情勢、または経済情勢等につき、ブリーフや情報提供を行います。

(3) 安全対策に関するアドバイスや治安機関窓口についての情報提供を行います。

(4) 大使館施設や行事を活用し、日本製品や日本ブランドの PR を行います。

https://www.mofa.go.jp/mofaj/ecm/ec/page23_001710.html#section7

在バングラデシュ日本国大使館では、これまで、天皇誕生日レセプションや各種文化行事における企業展示を実施いたしました。

(5) 知的財産に関する被害相談に応じるため、知的財産担当官を置いております。

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/annai/zaigai/chiteki/index.html>

(6) 日本企業の海外展開に向けた官民連携のため、インフラプロジェクト専門官を置いています。

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/infrastructure/senmonkan.html>

(7)その他、当館日本企業支援担当官が随時各種ご相談に対応いたしております。

https://www.mofa.go.jp/mofaj/annai/page22_000526.html

なお、民間企業同士のトラブルや警察への被害届提出など、政府機関としての性格上、対応が困難な場合もございますのでご了承をお願いします。

3 日本企業支援の現場にて

上記のような幅広い業務を行っておりますが、最近特に多いのは、治安情勢および税に関するトラブルのご相談です。治安情勢につきましては、2016年のダッカ襲撃テロ事件以降、特にテロのリスクや安全対策のあり方につき多数の照会をいただき、企業本社のリスク管理担当の御出張者の方々にもブリーフを行っております。税につきましては、税関における不公平な対応や不可解な追徴課税などのケースにつき多くのご相談をいただいております。深刻なケースについては、JETROとも連携し、国税庁への申し入れを行っております。そのような問題に直面されている企業様におかれては、当館日本企業支援担当官にご相談ください。

4 今後の取り組み

Bangladeshは、2021年までの所得国、そして2041年までの先進国入りを目指して掲げる大きなポテンシャルを持った一大市場であり、大使館としても、今後の日本企業の本格進出を後押ししていきたいと考えております。投資環境改善に向けたBangladesh政府の努力を支援しつつ、高い技術、信頼性、納期の厳守、プロジェクトのライフタイムコストの安さ、そしてこれまでアジア地域において数々の国の経済発展を支えてきた真摯な取り組みという、世界に誇る日本企業の良さを、大使館として売り込んでいく所存です。

Bangladeshへの進出をお考えの方におかれては、お気軽にご連絡ください。

■5) 理事寄稿『Reminiscent of a Bangladesh Born Commoner Living in Japan over Half a Century』

理事 七田央

Reminiscent of a Bangladesh Born Commoner Living in Japan over Half a Century

Reiwa Era 1st Year step-in on May 1st, 2019 was so harmonious and peaceful prevailing all over Japan and her people.

Having spent my days seated at the PC, the month of September came in when autumn cloud rose high in the sky, people recovered their breath. After the scorching heat of summer days, the comfortable climate set in.

Alas, then came that dreadful night on September 6th. Typhoon No. 15, named Faxai in English, brutally hit Metropolitan Tokyo and its vicinity areas such as Chiba, Saitama, Ibaragi, smashing land, sea and air. Faxai stroke a blow at the lifelines, transportations, telecommunication system, households, cultivation fields, forests, sea, airports and all infrastructures, which had been laboriously built over almost 70 years after WWII. We common people could not do much but silently pray that life return to the normal as soon as possible.

These days all human beings started questioning: Doesn't modern economic and political culture neglect our small planet world environment for the sake of modern living style?

Let me look back at my high school physics class and that of famous Sir Isaac Newton (1642~1727) motion in universe: mathematical principles of natural philosophy 3 Laws. Amongst these 3 Laws the third Law stated: Every action in nature, there is an equal and opposite reaction.

You need not to be a scientist but to be humanly conscious: Shall we not learn lessons that nature

reaction towards our actions over the past years. We did?

Isn't Typhoon No.15 falling on 3rd Law? Nowadays especially young people from all over the world come front and peacefully demonstrate in their respective countries even in front of the UN Headquarters in New York, holding General Assembly attended by world leaders.

Back to the main theme: the life of Bangladeshis living in Japan.

During British colonial period the Bengal deltaic region, major part now Bangladesh, had a very special affinity towards Japan, the land of rising Sun.

Robindranath Thakur, widely known as Tagore the Bengal poet, visited Japan and his philosophy left the very basics of peace and respect each other's culture.

After the birth of Bangladesh in the Year 1971, Bangladeshis people embraced that basics.

Bangladeshis started to come over to Japan for study and job for living.

Both Japanese and Bangladeshi Governments, through their hard work, helped to establish the bondage between two peoples. Japanese Government has appropriated massive funds for development projects of all sectors planned by Bangladesh Government in parallel with people to people interactions.

I spend part of my time on traveling various places of this beautiful country and closely on watching how Bangladeshis live their life in Japan. Bangladeshi students study at national and private universities and maintain a collocate living and respect each other through a frank and decent environment. Apart from students, Bangladeshis living in that area work and do business also following the same path.

I have observed that not only Japanese students but also people from all walks of life in those areas extend help to Bangladeshis. Many commoners help them learn Japanese useful for daily life. Japanese teachers, in most of the time out of their professional duty, help making a bridge and create an opportunity for them to participate in local events, Matsuri, legal consultations, house hunting, hospital service etc.

It is just my own observation that I find some difficulties for Bangladeshi children in going school, especially on primary and junior high school grades. Bangladesh culture upbringing children education much differs from Japanese education curriculums. They also have to learn Japanese language, needless to say, with tough Kanji characters.

If you allow me, I feel personally that they maintain the very strict discipline in studies, sports, activities, PTA and so forth at school life in Japan. Many Bangladeshi parents are not easy to cope with them. On the other hand, school principals and teachers are very cooperative to help parents to overcome them and serve as an intermediary for them to receive local voluntary services. Astonishingly, many parents are very ready in Japan to embrace the wishes and demands of their children to learn their language and win newly found cultures. Whereas in Bangladesh many parents will not behave themselves in the same way to listen to children suggestions.

Family bondage naturally gets a stronger living in Japan.

A new generation Bangladeshis in Japan has started getting a footing and served highly professional jobs such as teaching, work in major Japanese firms comprised by graduates from Japanese universities and second generations living in Japan. A small number of Bangladeshis set up their own companies and deal in trade mainly between Japan and Bangladesh.

Obviously, food culture is an important factor of living which help bring people together. Frankly saying I find delicious Bangladeshi dishes served at Bangladeshi houses in various parts of Japan. Both Japanese and Bangladeshis share food habit in common. Bangladeshis take mas, dal and bhat, i.e. fish,

bean soup, rice. and Japanese take sakana, misoshiru, gohan, i.e. fish, bean miso soup and rice. Doctors write a prescription that both belong in a healthy food category.

There are not many Bangladesh restaurants which serve genuine Bangladeshi cuisines, mainly curried tastes. Many Japanese have a fixed thought that Indian foods mean curry. That is an obvious reason why Bangladeshi restaurants stay in business with putting up their sign-board “Indian Restaurant.” It will take Bangladeshi restaurants sometime to have a solid footing to be popular to serve Bangladeshi cuisine in Japan.

This time in closing I should mention “Rugby World Cup Japan 2019,” hosted in Japan for the first time in Asia, quietly nails me up to watch the games on the TV. This started from the opening game between Japan and Russia on September 20th. Never have I found such exiting sports event while muscular men players charge against each other but are so disciplined especially when I see referees explain the judgements so courteously and patiently till players do accept the decisions taken by referee.

The game will go till final play on November 2nd, I have to confess that I am very much engaged.

■6) イベント、講演会の案内

□シャプラニール全国キャラバン 2019

<https://www.shaplaneer.org/caravan2019/>

(シャプラニール=市民による海外協力の会)

※詳細はリンク先をご確認ください。

近年甚大な自然災害が増えています。それは日本国内だけでなく世界中で起こっている問題です。

シャプラニールが全国で講演する「全国キャラバン 2019」、今年はシャプラニールのネパール事務所職員キル・バハドゥール・ガレが皆さまの街を訪ねて、ネパール国内の「地域で取り組む防災事業」についてお話しします。

講演タイトル:住民と行政による洪水に強いコミュニティづくり

講演者:キル・バハドゥール・ガレ ネパール事務所職員

講演者 キル・バハドゥール・ガレプロフィール: 2015年9月にネパール事務所に入職。これまでさまざまなNGOで働き、主に地域で活動しました。現在はずっと探していた防災減災の活動に携わることができて嬉しいです。団体の活動を通して、持続可能な環境を整え、そして第一に地域の人びとに良い成果をもたらしたいです。老舗の国際 NGO として、子どもたちが安心して暮らせるよう児童労働削減の活動にも貢献したいです。現在、プログラム・オフィサーとして、防災・減災プロジェクト、児童労働削減プロジェクトを担当しています。

○全国キャラバン 2019 開催スケジュール(随時更新中)

日時 講座タイトル/講師 (敬称略)

10月18日(金) 17:00~19:00

神奈川講演①

主催:シャプラニール・シヨミティ横浜連絡会

会場:横浜 YWCA

10月20日(日) 13:30~15:30(13:00 開場)

東京講演

主催:シャプラニール東京事務所

会場:JICA 地球ひろば

10月21日(月) 18:30~20:30

神奈川講演②

主催:逗子フェアトレードタウンの会

会場:逗子文化プラザ市民交流センター 第2会議室

10月22日(火) 13:30~15:30

仙台講演

主催:シャプラニール仙台ボンドウの会

会場:仙台市市民活動サポートセンター

10月26日(土) 13:30-15:30

栃木講演

主催:シャプラニールとちぎ架け橋の会

会場:とちぎボランティア NPO センターぽ・ぼ・ら

10月27日(日) 10:00-12:00

愛知講演

主催:シャプラニール愛知ネットワーク

会場:名古屋市市民活動推進センター

10月27日(日) 16:30-19:30

大阪講演①

主催:シャプラニール地域連絡会大阪

会場:①防災センター体験ツアー:大阪市立阿倍野防災センター あべのタスカル／

②講演会:わのわスタジオ

10月29日(火) 19:00-

大阪講演②

主催:茨木ほくちの会

会場:千提寺集落センター

10月31日(木) 19:00-21:00

佐賀講演

主催:佐賀 NGO ネットワーク

会場:佐賀県国際交流プラザ 研修室 AB

■7)『事務連絡』

○協会のメールアドレスの新規設定

協会ではこれまで info@japan-bangladesh.org のドレスで対外的なメールの受発信を行ってきましたが、この度新たなメールアドレスを下記の如く設定しました。

- ・事務局連絡、会員登録変更等協会業務 : jimukyoku@japan-bangladesh.org
 - ・メール・マガジンや協会から会員への連絡業務: kouho@japan-bangladesh.org
 - ・講演会のビデオ記録等の動画配信業務 : douga@japan-bangladesh.org
- 10月からのメルマガ配信は kouho@japan-bangladesh.org で行います

○会員情報変更届のお願い:

事務局では会員各位の連絡先等の最新版を常備する必要がありますので、皆様の住所変更、メールアドレスが変更されました場合は< jimukyoku@japan-bangladesh.org >までお知らせ下さるようお願い致します。

○本協会の活動などについてご意見等ありましたら、お知らせください。

また、メール・マガジンに載せたいご意見、情報、その他昔のバングラデシュ勤務時の思い出などお寄せ下さい。

宛先:< jimukyoku@japan-bangladesh.org >

(約1500字。体裁上若干の修正あり得ることご了承下さい。)

=====

一般社団法人 日本バングラデシュ協会

<http://www.japan-bangladesh.org/>